

## 実方説話について

### ——実方後代資料の検討——

説話集や物語、隨筆、歌論書等にしばしば登場する藤原実方は、歌人として業平について逸話の多い人物であろう。そしてその内容は風雅な歌人の話にとどまらず、従来の説話に実方の名が粉れ込み、或は又、主人公として収まり、はてはその生涯は伝奇的に脚色されて、あの陸奥下りの説話としてまとまっていくなど、複雑な様相を呈している。

これら雑多な実方説話について、早くは池田亀鑑<sup>(1)</sup>氏、又、近年には福田幸子氏による論考<sup>(2)</sup>等がある。しかし乍ら、その説話資料の取り扱いには不分明なところがあり、実方説話の全体象が却って不明瞭となっているように思う。

小稿は、まず実方の後代の資料の中から、説話として扱うべきものの選別を試みて、実方説話の姿を明確にしていきたいと

考える。

岡 崑 偉 久 子

#### (一) 実方に関する後代資料の検討

後代資料の主なものを、必要に応じて内容を簡単に附し、年代順に配列する。

〔注記〕

一、表中に収める資料は一五〇〇年あたりまでとした。その理由は、江戸時代以降の資料は、それ以前の実方説話を引用したものの(『奥の細道』『東遊記』『閑窓瑣談』……)あるいは史書、説話、その他の別なく、実方記事を集録したものの(『大日本史』)等で、新しい内容をもつものはみられない。

更に下れば、むしろ研究(『笠島道祖神記』、注釈(実方集私記))的なものになっていくからである。

二、各資料の、中でも説話集の成立年代はその性質上いうまでもなく不明なものが多い。ここでは一応の配列を試みたものの、特に<sup>二</sup>を施した、一三世紀から一四世紀に成立したいわゆる中世の説話群については、成立どころかその順序さえ不明であり、正確を期し難い。

三、表は二段に分けて、実方後代資料の中で説話として扱うべきでないものは上段に、実方説話として取り扱うべきものは下段に収めた。その判断の理由については表のあとに述べることとする。

1100		成立年代	成立年代
1104	(未詳)	998	実方説話資料
統本朝往生伝	今昔物語	(実方死)	

1150			
1157	1154	1142	1115
1158	1160	1155	
袋草子 時鳥の歌のこと。 実方集のこと。	本朝世紀	本朝統文粹	俊類髓 実方連歌一首。 「みかよのもちるはくはし」歌のこと。

(1170頃)

- 今鏡
- ① 実方、陸奥にて五月、しょうぶのかわりにかつみをふかせたこと。
  - ② 実方中將の墓のこと。
  - ③ 実方、雀となること。

未詳	1200	
1165 ↓ 1248	1197 ↓ 1201	1198

和歌色葉  
母、左大臣雅信女  
娘、小將内侍（白河  
院女房）

古来風躰抄  
歌よみであること。  
恋の歌四首（初選本  
には三首）。  
時鳥歌のこと。

中古歌仙三十六人  
伝

1212 ↓ 1215	1211(未詳) ↓ 1216	山家集② 無名抄 ① 続本朝往生伝の引用
<p>古事談 ④ 実方、試案選参の こと。 ⑤ 行成との口論から 陸奥国守となるこ と。 ⑥ 阿古屋松のこと。 ①・③</p>		

1300

(未詳)	(1240頃)
世継物語 円融院崩御の折の実 方のうた。 消少納言との贈答の こと。	八雲御抄 歌人であること。

(1300頃か) 1252

平家物語⑥ 西行物語②	十訓抄④⑤③ 撰集抄 ⑦ 雨に濡れて「桜が り」歌を詠んだ実方 を、行成が「おこなり」 と評すこと。 徒然草 ⑧ 賀茂の岩本・橋本 は葉平・実方のこ と。
----------------	--

1486	(1481)	(未詳)	(1350頃か)
兼邦百首哥抄 ①賀茂の水もとの社にて実方が三尺の鯉を切ること。	東京隨筆 ⑥・①・④・⑤・③	源平盛衰記 ⑤・⑥・③ ⑩実方、陸奥にて、道祖神に殺されたこと。	古今集序注 ⑨実方、陸奥にて、小町の首の骨とあう。
		(拾芥抄・河海抄) <sub>3</sub>	

1500		
1512	1510	(未詳)
体源抄④	兼載雜談⑧	神祇拾遺⑧

この表において、実方説話からは除くべきもの（上段のもの）とした理由は以下の通りである。

まず『今昔物語』。これはいうまでもなく説話集である。が、しかし、実方記事のあたりを説話としてみることにには問題がある。物語中、実方記事は三巻にわたって四ヶ所に見える。概略すれば、

一、陸奥守維叙（実方前任者）が荒廢した神社を立派に再興して報恩をうける話。この中に「而ル間實方ノ中将ト云フ人、此ノ國ノ守ニ成テ下ケル程ニ、其ノ騒ギニ此ノ夢ノ事

モ忘ニケリ」といふ一節がある（巻第十九、「陸奥國神報守平維叙恩語」第卅二）。

二、実方が「不思議、陸奥守ニ成テ、其國ニ下テ有ケル」時の、宣方中将との贈答のこと。道信中将が急逝した折の実方の歌。幼子が亡くなった時の実方の歌。そして最後に「此中将ハ此ク和歌ヲ讀ム方ナム極タリケル。而ル間、陸奥守ニ成テ、其國ニ下テ、三年ト云ニ、墓先ク失ニケレバ、哀レナル事、實ニ先限リシテ止ニケリ。其ノ子ノ朝元ト云ヒシ人モ、和歌ノ上手ニテナム有ケルトナム語り傳ヘタルトヤ」と結ぶ（巻第二十四、「藤原實方朝臣於陸奥國讀和歌語」第卅七）。

三、大江匡衡の和歌に関する話の中に、「亦、此ノ匡衡、實方朝臣ノ陸奥守ニ成テ、彼國ニ下テ有ケル時ニ、匡衡此ナム讀テ遣ケル、都ニハタレヲカ君ハ思ヒツル、ミヤコノ人ハキミヲコフメリト。實方朝臣、此ヲ見テ、定テ返シ有ケム。然ドモ其レヲバ語り不傳ヘ」とある（巻第二十四、「大江匡衡和琴讀和歌語」第五十二）。

四、冒頭に、「今昔、實方中将ト云人陸奥守ニ成テ、其ノ國ニ下タルケルヲ、其ノ人ハ止事先キ公違ナレバ、國ノ内ノ可然キ兵共、皆前ノ守ニモ不似、此ノ守ヲ饜應シテ、夜

ル晝ル館ノ宮仕怠ル事无カリケリ」とある。しかし続いて、当地の大豪族である余五と諸任との所領争いが起ったことが記され、それに対して実方は、「二人乍ラ國ノ可然キ者ニテ有ケレバ、守否定メ不切シテ有ケル程ニ、守三年ト云ニ失ニケレバ、其後共ニ愁ノ憤リ不正シテ……」という状況であった。この戦乱は國境を越える大規模なものになった後、余五の勝利に終った（巻第二十五、「平維茂割藤原諸任語」第五）。

以上である。この内、一と四は、陸奥における実方、及び陸奥下向前後の当地の状況を知るのに重要なものである。それは、神の報恩云々を除けば、一（巻十九第三十二話）の維叙が実方の前任者であったことや、そのあとの任常陸守のことは、『尊卑分脈』『北山抄』『榮花物語』から確認できるからである。又、四（巻二十五第五話）についても、『御堂関白記』『本朝世紀』等に徴して、ほぼ大筋誤りないことが確認されているためである。又、二（巻二十四第三十七話）と三（巻二十四第五十二話）は、それぞれに『後拾遺集』に基いたものと認められ、当代の私家集からもその内容が確認できる。一方、これら四つの記事の内容をみても、実方任陸奥守前後の事柄であるにもかかわらず、後代説話の中核をなす陸奥左遷（行成との争い）陸

奥左遷（道祖神に殺される）及びそれを思わせるような記述は一切ない。それ故、これらを実方説話として扱ふことは、ひとまずひかえたい。

次に『続本朝往生伝』

一条天皇は（中略）時の人を得たること、またここに盛となせり（中略）和歌には道信・実方・長能・輔親・式部・衛門・曾綱好忠

これは大江匡房が実方を一流歌人としたということであって、説話というものではない。同様に、後代の人が実方を歌よみとして認めて評価するものに、

。『俊頼隨腦』——連歌のところ二首、恋歌に一首、実方の歌をとる。

。『袋草子』——①郭公秀歌五首の中に実方の時鳥の歌を入れる。②『実方集』のこと。

。『古来風体抄』——実方は公任をはじめとする当代一流歌人の一人であるとし、恋歌に三首（再選本には四首）、夏歌に時鳥の歌一首をとる。

。『八雲御抄』——実方は道信、長能、道濟と並ぶ歌人であること。

等がある。この中で袋草子の②『実方集』についての記事は

「國陸院時人雖稱仁和帝又不注同記。件號見実方集」というだけのものであるが、『実方集』の成立及び流布を知るためには貴重な手掛りとなる。

次に『本朝統文粹』。この中の、正四位下行部大輔藤原朝臣の陸奥守と京官とを兼任したいとの申文に、兼官例として実方の名が見える。当時、官職を願い出るには、前例を並べることがその形式である。その場合、ことさらに傷のある人を前例にあげることはまず考えられず、この申文の日付、保延元年（一一三五）には、少なくとも実方陸奥左遷に關した説話は、広く世間に流布してはいなかったと言えるのではないか。従来、この資料に言及したものをみないが、説話の流布の状況、及び、当時の京官と地方官との兼任の実態から実方陸奥下向を考える場合に重要な示唆を含むものであると思う。

『本朝世紀』の記事は、実方陸奥下向時の「権記」の記事を簡潔にしたものである。『本朝世紀』自体の史料としての性格からみて説話資料から省いてよいと思う。

『和歌色集』には、名譽歌仙の部に、実方母及び娘の記事がみえる。

拾遺後拾 實方中將、藤侍徒定時息（小一条左大臣孫）母左大臣雅信御女、

臣雅信御女、

後拾金集 少将内侍 前能登守藤原實方女、母輔親御女、白河院女房<sup>(10)</sup>

これは、『尊卑分脈』『中古三十六人歌仙伝』にもみえ、検討を要する点に残るものの、伝説というよりはむしろ史実である。

『中古歌仙三十六人伝』は、実方の官歴がまとまっている唯一のもので、実方伝記研究の基本的な拠りどころとなるものである。

『世継物語』には、円融帝崩御の折の実方の歌、及び、小兵衛の赤紐が解けた折の実方の歌と清少納言の返歌とを載せる。

先の記事は『栄花物語』にみえ、後は『枕草子』にみえるものである。記述内要の簡略化からみても、おそらくこの二書からの引用であると思われる。これらの歌は当代私家集にもみえ、説話として扱わない。

以上、実方説話を考える上で、ひとまず説話から除いた方がよいと思われる資料についてみてきたわけであるが、これらは、多くの歌論書がそうであったように歌人としての実方に對する後代からの評価と、史実を伝えんとする資料、言わば伝記的資料とに大別されるようである。これらについての考察は別稿にゆずり、ここでは表の下段に収めた実方説話について考えていきたい。

## (二) 実方説話について

後代資料の中で、いわゆる実方説話として残ったものを、その内容より分類して数えると、表中下段のごとく、主なものは十一項目となる。一覧してまず気付くことは、雑多な内容にもかかわらず、その舞台は、賀茂と、陸奥及び陸奥下向にかかわるものに限定される、ということである。従って分類の適否はさておき、仮に陸奥系・賀茂系と名づけ、二系統に大別する。

### ○ 陸奥系説話

陸奥系の説話としては、

- ① 実方陸奥にて、しょうぶのかわりにかつみをふかせたこと。
- ② 陸奥の中將墓のこと。
- ③ 実方死後に雀となり、京に帰ること（以上①②③『今鏡』初出）。
- ④ 行成との口論から陸奥に左遷となること。
- ⑤ 陸奥にての阿古屋松探し（以上④⑤『古事談』初出）。
- ⑥ 雨に濡れて「桜がり」歌を詠んだ実方を行成が「おこ」と評すること（↑⑤の原因）（『撰集抄』初出）。

⑨実方、陸奥にて小町の首の骨とあうこと（『古今集序注』

初出）

⑩実方、陸奥にて道祖神に殺されること（『⑤の結末』）（『源

平盛衰記』初出）

の八つを数える。その内の③④⑤⑥⑦⑧が、かの著名な実方陸奥左遷に關した説話であり、残りの①②⑨⑩は、陸奥における歌人実方の説話とでも言うべきものである。このような内容の相違から、陸奥系説話を更に二分して考察する。

#### 陸奥系——歌人説話

①の「はなかつみ」云々の話は、

みちのをくためなりと申しが。くにまかりくだりて。五月の四日たちに庁官とかいふものとしをいたるいできて。

あやめふかするをみれば。れいのしやうふにはあらぬきをふきけるを見て。けふはあやめこそよく日にてあるに、これはいかなるものをふくぞとはせければ。つたへうけ給はるは。この國にはむかし五月とてあやめふく事もしり侍らざりけるに。「この中将さねかたなり」中将のみたちの御とき。けふはあやめふくものを。いかにさる事なきにかとのたまはせければ。國のれいさることも侍らずと申し

けるを。さみだれのころなど。のきのしづくもあやめよりこそ。いますこし見るにもきくにも。こゝろすむことなれはやくふくべきなりと侍りけれど。この國にはをひ侍らぬなりと申ければ。さりとてもいかでかかひなくてはあらん。あさかのぬまのはながつみといふものあり。それをふけとの給はせけるより。ことも申すものをなんふき侍とぞ。むさしのにうだうたかよりと申すはかたり侍りける。もししかあらば。ひくてもたゆくながきねといふうたぞおぼつかなく侍（『今鏡』）

というものである。この話は、『今鏡』に約半世紀先だつ「俊頼隨腦」の次の記事に、実方の名を入れたならばはば成立する。

みちのくの浅香の沼のはながつみかつみる人の恋しきやなぞ

かつみといへるはこもをいふなり。かやうの物も所の名も所にしたがひてかはれば、伊勢の国あしをば浜萩といへるが如くに、陸奥国にはこもをかつみといへるなめり。五月五日にも人の家にあやめをふかで、かつみふきとてこもをぞふくなる。かの國にはむかし葺浦のなかりけるとぞ承りしに、このごろは浅香の沼にあやめをひかするは辭事とも申しつべし



つまり、このような陸奥国の風物の話に、当地で急逝した風流歌人実方が結びついていったものと思われる。

次に、②陸奥の中將墓の話は、およそ南北朝の成立とされる『源平盛衰記』には、④道祖神に殺された話のあとに「其墓彼社の傍に今に是有りといへり」と、実方は道祖神に殺されたから、道祖神の社のすぐ傍にその墓があるのだと、左遷説話の中にとりこまれていた。しかし乍ら陸奥国で国司在任中に急逝した実方であるから、何らかの形で墓があるいはその跡が当地にあるのは当然であって、左遷説話にとり入れる必要はないと思われる。中將墓の話が始めてみえる『今鏡』には、

さねかたの中將の御はかみちのをくにぞ侍なると。つたへき、はべし。ま事にや。

とあり、そして続く、『出家集』、『西行物語』にも、陸奥の国にまかりたりけるに、野の中に常よりもとおぼしき塚の見えけるを、人に問ひければ、中將の御墓と申は是が事なりと申しければ、中將とは誰がことぞと、又問ひければ、実方の御事なりと申ける（『出家集』）

ある野の中を過けるに、ことありかほのつかのみえければ、道にあひたる人にあれば何と申つかそとたつぬれば、中將実方朝臣の御はかなりと申ければ、いと、かなしきまさら

て……（『西行物語』）<sup>(1)</sup>

と、ただ陸奥に実方の墓ありと伝えるばかりである。もちろん、『出家集』、『西行物語』の成立年次は不明で、現存のものばかり形を変えて後代に成立したものである。しかし、少なくとも西行の歌及び詞書がその基礎資料であることには変わりなく、西行の生きた時代（一一八一—一九〇）は『今鏡』成立頃（一一八〇頃）にほぼ重なって、ここでの参考にして良いと思われる。

次に、⑥阿古屋松探しの話は、『古事談』に始めてみえ、

実方経廻奥州之間、為見哥枕毎日出行。或日アコヤノ松ミニトテ欲出之処、国人申云。アコヤノ松ト申所。コノ國中ニ候ハネト申ノ時。老翁一人進出申云。君ハイツベキ月ノイデヤラヌカナト申古歌ヲ思召テ。被仰下候。然バ件哥ハ出羽陸奥未嵬之時読之哥也。被堺兩國之後者。件松出羽国方ニ罷成候也ト申ケリ。<sup>(2)</sup>

とある。下つては『平家物語』、更に『源平盛衰記』並びに謡曲「阿古屋松」等には、実方に教えたこの老翁は、実は塩竈明神であったとつけ加えている。この話は、後に述べる左遷説話中の⑤（行成との争いを帝が聞き実方を陸奥守とする話。やはり『古事談』初出）の、

……実方ヲバ調枕見テマイルトテ。被任陸奥守云々

とある、この「調枕」の語と結びついて、後の『源平盛衰記』には、

実方の中將を召して、歌枕注して進せよとて、東の奥へそ流されける。実方三年の間名所名所を注しけるに、阿古屋の松ぞなかりける……△阿古屋松探しの話▽……加縁に名所をば注して進せられ共、勅免はなかりけり

と、左遷説話の一連の話となっている。しかし、初出の『古事談』に④阿古屋松探しのこと、⑤陸奥左遷のことがそれぞれ離れて別の項目として記してあるように、先述の①「はなかつみの話」と同様、単独にあったものではないかと思われる。当代一流歌人実方に相応しい一説話と受けとれる。

次に、下って親房の『古今集序注』には、小町の条に、奥州の方にて命死去頼。実方朝臣下向の時に、ふるき首の目の穴より。薄の生出たりけるをみて。とりのけたりとも言也。<sup>(15)</sup>

と、実方が小町の首の骨をみたとの話がある。これは池田龜鑑氏も指摘されているように、長明『無名抄』には小町の鬨歌と連歌を詠みあう人は業平であり、『無名草子』には道信であるのが、本書には実方となっているのである。すでに成立してい

る話の中に、歌人・中將・陸奥といった、その主人公のイメージの類似から、たやすく名前が入れ替っていったものであろう。以上、①②③④の四つが、実方陸奥系説話中の、単独的な逸話ともいふべきものであり、その内容から受ける印象はいずれも決して悪いものではなく、むしろ面目を施すものといえる。

#### 陸奥系——左遷説話

実方左遷説話は、陸奥系説話の中の、③④⑤⑥の四つとなる。これらの内、特にあとの三つは、左遷事件(⑤)、その原因(⑥)、その結末(⑥)というふうに緊密に結びついている。

そして③実方雀の話も、おおかたは左遷説話の続きに、死後の実方の哀れな姿として出てくる。

しかし、この雀の話からは、あとの三つとは少し異った印象をうける。あとの三つはそれぞれに、実方の生涯の中で不可解な、従って興味深い事件についての後の人なりの解釈・説明がつけ加えられていったものだが、この雀の話は直接にはそれを解釈するものではないからである。又、文献上も一一〇〇年代後半の『今鏡』(一一八〇頃か)初出で、他の三つと比べて約一世紀ばかり早い。引用すれば、

さねかたの中將の御はかみちのをくにぞ侍なると。つた

へき、はべし。ま事にや。藏人のとうにもなり給はで。みちのをくのかみにぞなりてかかれたまひにしかば。このよまで殿上のつきめの大ばんすまたるをば。すゞめの、ぼりてくふをりなどぞ侍なる。実方の中将の頭になり給はぬ。

思ひのこりてをはずするなると申すも。まことに侍らば。あはれにはづかしくも。すゑの世の人は侍ることかな。

というものである。この話をそのままに読めば、実方の陸奥下向自体については嘆いておらず、藏人頭とならずに陸奥にて急逝したことを繰り返し惜しんでいることに気づく。そして左遷説話の先入観なしに読めば、あたかも藏人頭となる目前の死去というふうにさえ、とれないことはない。その意味であまりに惜しまれて心が残るのである。そうでもなければ、つまり左遷を前提としているものならば、続いて語られる雀となって都に上るといふのは一体どう考えたらよいのであろうか。もしも、藏人頭の席をめぐつての争いに敗れて陸奥左遷という憂き目を見、失意の内に当地にて恨みを残したまま死んだ実方であれば、雀というのはあまりに卑小であり愛らしすぎるのではないか。左遷——失意の客死といえ、すぐに運想されるのは菅原道真ではないかと思うが、道真の報復は、天神となり空を駆けめぐって京に帰り、自分を左遷した者達を次々と祟り殺し焼き殺し、

更にはその一族を根絶やしにせんとするすさまじいものであった。右大臣であった道真に比し、近衛中将である実方は小粒ではあるが、それでも恨みを残して死んだ者が、死後雀となって米を一粒ずつ食べるのであろうか。とすれば少なくともそこには報復の姿はない。本人にとってみじめである以外の何物でもない。又、雀説話という方面から考えても、雀の姿や行動の由来を説くもの他には、雀孝行、舌切り雀、腰折れ雀、雀観音……と、報恩談らしきものがほとんどである。雀説話の側からも、左遷地で恨みを残して死んだ者のなれのはてというのは異例であろう。池田龜鑑氏は、この実方雀の話について、「実方が雀になったという解釈は、たとい説話であるにせよ、可憐にして愛すべき彼の性格を最も率直に反映したものと、言うことが出来よう」と説かれる<sup>(18)</sup>。一つの見解ではあるが、実方の性格をそのような意味あいでは雀に象徴させる、ということにも従いかねる。現在のところ、この実方雀の話がどこからきたものか、又、何を意味しているのか不明であり、疑問点を並べたてるとばかりだが、先述したような種々の理由から、残りの三つのいわゆる左遷説話とは切り離して考えるべきではないかと思つてゐる。

残りの三つの左遷説話(⑤⑦⑩)は、後の人に実方陸奥左遷

の真相はこうであつたと説くものである。並べて記せば、

⑤ 左遷事件

一条院御時。実方與行成於殿上口論之間。実方取行成之冠  
投棄小庭退散云々。行成無繆氣。静喚主殿司取寄冠。擺砂  
着之云。左道ニイマスル公違哉云々。主上自小節御覽ジテ。  
行成ハ召任ツベキ者也ケリトテ。被補藏人頭。実方ヲバ謫  
枕見テマイルトテ。被任陸奥守云々。於任國逝去云々。行  
成補職事任弃官。多以失礼。漸尋知之。後勝傍倫。コレ携  
文書之所致也（『古事談』臣節）

⑥ 昔殿上のおのことも。花みんとて。東山におはしたりける  
に。俄に無心雨降て。人々実騷給へりけるに。実方中将い  
ときはかす木の本に立寄て。

桜かり雨は降きぬ同じくはぬるとも花の陰に宿らん  
と説て。かくれ給はさりければ。花よりもりくる雨に。さ  
なからぬれて。装束しほりかね侍。此事興有事に人々思ひ  
あはれけり。又の日斎信の大納言。主上にかゝる面白事の  
侍しと。被奏に。行成其時藏人頭にておはしけるか。歌は  
面白し。実方はおこなりと。の給てけり。此詞を実方もれ  
聞給ひて。深く恨をふくみ給とそ聞侍る（『撰集抄』）

⑦ 笠島道祖神の事

終に奥州名取郡笠島の道祖神に獻殺されにけり。実方馬に  
乗りながら、彼道祖神の前を通らんとしけるに、人の諫め  
て云ひけるは、此神は効驗無双の靈神、賞罰分明也、下馬  
して再拜して過ぎ給へと云ふ。実方聞うて云ふ、何なる神  
ぞと、答へけるは、これは都の賀茂の河原の西、一条の北  
の辺におはする出雲路の道祖神の女也けるを、いつきかし  
づきて、よき夫に合せんとしけるを、商人に嫁きて、親に  
勘当せられて、此國へ追下され給へりけるを、國人是を崇  
め敬ひて、陰相を造りて神前に懸荘り奉りて、是を祈り申  
すに、叶はずと云ふ事なし。我が御身も都の人なれば、さ  
こそ上に度くましますらめ、敬神再拜し祈り申して、故郷  
に還り上り給へかしと云ければ、実方、さては此神下品の  
女神にや、我下馬に及ばずとて、馬を打つて通りけるに、  
神明怒を成して、馬をも主をも罰し殺し給ひけり。其葬彼  
社の傍に今に是有りといへり。人臣に列して人に礼を致さ  
ざれば流罪せられ、神道を欺いて神に拝を成さざれば横死  
にあへり、実に著る人也けり（『源平盛衰記』）

というものである。実方の陸奥下向は左遷であるとの認識のも  
とに、まずその理由となる行成との口論事件⑤の話が、『古事  
談』にみえ、続いて、その原因を説明する⑦桜がり歌の話が成

立していくわけである。ただし⑩の道祖神の話は、文献としては最も早い『源平盛衰記』ですでに⑤の結末的に語られているけれども、⑤とほぼ並んで、あるいはもっと早くから成立していたものではないかと思われる。名門の貴公子で当代一流歌人、その名望、才能から宮廷の花形であった実方が、陸奥という遙かな国で、しかも三十代の若さで急逝したのである。その下向が左遷であるなしに係わらず、都の人々の想いをさそって、急逝のわけについてこうした物語が生れてきてても不思議はないからである。<sup>(20)</sup>

これら三つの左遷説話の前提となる、実方陸奥下向は左遷配流によるものという点については、実方は朝廷で正式に罷申の儀を行なわれ饗応にあずかっていたこと、<sup>(21)</sup>多くの人々と贈答を交し、妻子を伴って下向していることなどから、否定されることである。しかし、左遷配流自体は史実をもって否定される事ではあるものの、これら一連の話は、実方生涯の謎ともいえる陸奥下向を正面から説くものだけに、部分的には何かを伝え残し、あるいは少なくともいくつかの視点を提供しているように思われる。

まず⑨行成との争い。これについては今のところ全く不明である。ただ実方と行成をつなぐものとしては清少納言の存在が

ある。両者が清少納言と愛人の関係にあったことは、当代私家集及び『枕草子』から想像されるからである。清少納言をめくっての二人の争いとなれば又劇的ではあるが、実方との関係は陸奥赴任（長徳元年九月）以前であり、行成とは行成蔵人頭就任（長徳元年八月）以降であって、両者は実際には重ならない。又、清少納言にとつての実方は、いわばあこがれの恋人、特別な存在であったようだが、実方にとつての清少納言は大勢の愛人の内の一人以上の存在であったのかどうかいささか疑問である。行成も清少納言に対し、定子中官方の便利な存在として以上に深い思い入れがあったかどうか、これ又疑問である。それにしても、清少納言の存在はさておいても、実方と行成とは興味のあるとりあわせである。二人はともにごく幼い内に父親を失っている。このことは平安中期の貴族社会にあつてはほとんど致命的ともいえることだが、この共通のハンディのもと、二人はそれぞれに違う個性を持って何とかなつた上あたりまでたどりついている。弁官出身で能書家で実務能力にだけた有能な官僚、しかしどちらかといえば、歌は苦手な行成。武官出身で容姿端麗、舞を得意とし当代一流の歌人で好者として名高い実方。同時代の狭い宮中であつて、お互いにどのような意識を持っていたのか、特に実方が右近中将を兼ねた陸奥守となり、行

成が蔵人頭となつた長徳元年頃にはどうであつたか、興味をひくところである。現在、この長徳元年頃、実方が蔵人頭となる可能性はほとんどなかつたかのように言われているが、実際にはそうでなく、実方も充分に蔵人頭の候補であり得た。このことは別稿にゆずるが、出世争いとまではいかなくても、とかく注目されやすい二人であつたことは事実であると思う。

続いてこの話は、帝の「調枕見テマイレ」との言葉をのせている。地名(名所)が歌枕として固定していくことは、勅撰集時代に入つて著しい高まりをみせるが、特にこの一条帝の頃盛んであつたことは周知のことである。実際、実方下向に際しても、友人達と交した贈答は歌枕に寄せたものがほとんどである。ただ、当時部の人が陸奥を想う時、歌枕に寄せる以外には詠みようがないとも考えられるが、いずれにせよ、当代一流歌人の陸奥下向となれば、それを物語る話の中に「歌枕云々」の言葉が入つてむしろ当然であらう。

次に、「撰集抄」の⑦の話にある「桜がり……」の歌は、池田氏の説かれるように、元来説人知らずとして伝わっているものである。やはり⑥の行成との争いの話が先にあつて、その原因を述べるために後に、附会していったものではないかと思われる。ここに登場する行成がすでに蔵人頭となつてしまつてい

るのも、その一証と思われる。

そして、「源平盛衰記」の⑩道祖神に殺された話となるのだが、これは又一段と荒唐無稽な、それだけにおもしろい話である。実方を殺した女神は「都の賀茂の河原の西、一条の北の辺におはする出雲路の道祖神の女」というわけだが、京の出雲路神といえ、例えば『都名所図絵』に、

出雲路神は京極の西今出川の北にあり。祭る所猿田彦命にして道祖神なり。今幸神といふ。旧地は京極の東也。

とある出雲路神であらう。もともと笠島道祖神とは猿田彦命であつたのを、郷党誤り伝えて、前記のような女神とされてしまつたとのことであるから、「出雲路の道祖神の女」というところにも、もともとの神名を伝えているわけである。そして、「出雲路の……」といえ、同時に当時の部の人々はみな上御霊社を思ひうかべたに違いない。それは、朱雀院の時八所御霊を鎮めた地は上出雲寺の地であつて、故に八所御霊のことを出雲路の御霊とも言つたからである。平安及び中世の御霊信仰がどのようなものであつたか、そしてそれがいかに人々を畏れおのかせていたかについては周知のところであるが、八所御霊を連想したのであらう当時の人々は、出雲路の神の娘ならばいかにも速やかにどのような祟りがあつてもなるほどとなつたに違

ない。

ところで実方が陸奥国にて急逝した長徳三年頃、陸奥国が二大勢力に別れた豪族同士の戦いの最中であつたことは『今昔物語』によつて知られている。こころあたりの『今昔』の記事が、当時の史書・家記の類と照らしてはほゞ誤りのないことは、目崎徳衛氏の考察されたところである。又、『今昔物語』巻十九第三十二話に、陸奥守維叙が、任官の最初の仕事である神拜の時、荒れはてた神社を立派に再興してその神より報恩を受けたとの話がある。それは実方の場合とあまりにも対照的な話であるが、この維叙は、平貞盛の子で東国を地盤とする武將であり、しかも、陸奥守実方の前任者である。以下に述べることは、全くの私見にしかすぎないのだが、もし仮に実方の死が地方豪族の大規模な戦乱にまきこまれた不慮の死であつたとしたら、——実方の前任者維叙のような例もあることである、これとは対照的に、実方は土地の「賞罰分明」な神を蔑ろにして殺された、しかもその神はもともと国の神ではなく、八所御霊の影を持つ崇りなす神である——という話になれば、都にも説得力を持ち、当地には、はなはだ都合の良いことであつたに違いない。国を二分しての豪族間の大規模な戦いとなれば、実方の国司としての立場上、当然に対応をせまられるところであり、実方急逝の

真相の可能性として充分あり得るのではないかと思う。

以上、実方説話中から、陸奥系と目されるものを、左遷説話とその他単独的歌人逸話とに分けて見てきた。単独的なものには実方の面目を施すものが多いことはすでに述べたが、反対に左遷説話には、全く思いあがつた短気な人物として実方が描かれていた。初期のものはそうでもないのだが、時代が下れば下るほど、その度合がはなはだしくなっていくようである。

又、左遷説話についてなお附言すれば、実方の都より遠く離れた陸奥にての急逝ということが、どうしても、配流地での非運の死——道真を連想させたのではないかと思われる。その連想が、いつしか実方の陸奥下向全体を悲しむべき左遷であるとしていった、大きな要因ではなかつたであろうか。すでに述べたように実方左遷説話の中には、中世説話の例にもれず、御霊信仰が色濃く影を落しており、その成長に影響を及ぼしているように思われる。

#### 。賀茂系説話

これは初めに述べたように、その舞台がいずれも賀茂であるところからそう称するわけである。一覧すれば、

④臨時祭の試楽に運参した実方の、花のかわりに呉竹をかざ

しとしたその舞姿が優美であったこと（『古事談』初出）

⑧賀茂の岩本・橋本は業平・実方であることと（『徒然草』初出）

⑨賀茂の水もとの社にて、実方が三尺の鯉を切ること（『兼  
邦百首歌抄』初出）  
の三つである。

まず、④の試案運参の話は、実方説話の中で左遷説話と並んで有名なのである。

一条院御時。臨時祭試案。実方中将依運参。不賜挿頭花。

逐加舞之間。進寄竹台許。折只竹枝挿之。優美之由。滿座

感歎。依之試案挿頭永用只竹枝云々（『古事談』）

この話は、それぞれの説話集によって、運参のことを主とするか、あるいは機知に富んだ只竹の優美であった旨を強調するかの二通りに扱われている。実方が臨時の試案に何度か舞人となつたことは、『小右記』の記事からも実方の歌集からも明らかである。やはり得意の芸能であり、年ごとの舞人として面目を施してしたことであろうと思われる。ただ、運参の真偽は、『小右記』『権記』等に実方の先例に習わぬ例が二、三みえるもの、それは不明であり、只竹についても又、同様である。

次の⑩橋本社の話は、

賀茂の岩本・橋本は、業平・実方なり（『徒然草』<sup>30</sup>）

というものであって、これについては『枕草子』に注目すべき記事がみえる。『枕草子』には実方の記事が三ヶ所にあつて、一つは済時主催の小白河八講の折のこと、一つは小兵衛の赤紐が解けた折の実方の歌と清少納言の返歌のこと、そして残る一つが、ここで問題とする、次の記事である。

頭の中將といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、亡くなりて上の社の橋の下にあなるを聞けば、ゆゆしう、ものをさしも思ひ入れじとおもへど、なほこのめでたき事をこそ、さらにえおもひ棄つまじけれ（<sup>31</sup>）  
従来、この人物については未詳となつてゐる。この段の「頭中將」という箇所諸本によつて異同があり、そして当代のどの人物をもつてきても問題が残るためである。しかし乍ら、『春曙抄』以来、実方説が有力であり、ことに近時は岸上・萩谷氏の論考により、ほぼ確定したのではないか。やはり、死後中將と呼ばれ、年ごとに舞人にてめでたき者と、清少納言がしみじみ述べするのは、当時、実方をおいて他にないと思われる。それ故、「亡くなりて上の社の橋の下にあなるを聞けば」（『枕草子』）というこの記事こそは、後の『徒然草』を初出として『神祇拾遺』『兼載雑談』といった神祇関係の書に継がれてい



く、この「賀茂の橋本は実方である」という言い伝えのものと姿とみたいのである。

①の実方、三尺の鯉を切るという話。

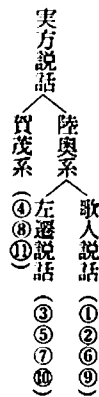
其外伝承に、社頭の鯉と云事有。実方の中将賀茂の水もとの社にして、刀をくわへて三尺の鯉のあがりけるをば。何とさりしやらん（『兼邦百首歌抄』<sup>11</sup>）

これはどこからきたものであろうか。実方は武官であるから剣も使ったではあろうが、何故このような話が伝わっているのかあるいは何かの話に紛れたのか。今のところ全く不明である。

これら賀茂系の説話は、陸奥系のものに比して相互の連がりもなく断片的であるため、見落されがちである。しかし、実方死後すぐの『枕草子』の記述に係わりをもつとするならば、やはり注意すべきものであると思われる。

### おわりに

以上、種々雑多な様相を呈している実方説話に対して、次のような分類を試みてきたわけである。



しかし乍ら説話の一応の概観を終えてみれば、その内容からはむしろ、実方説話は左遷説話と歌人説話（陸奥系歌人説話と賀茂系説話とをあわせて）とに二大別する方がより適切であるように思われる。そして歌人説話をその舞台で分けるならば、陸奥と賀茂とにわたるわけである。

左遷説話は、前述のように、実方雀の話を別とすれば、『古事談』『撰集抄』そして少し下って『源平盛衰記』と、いわゆる中世の説話集において成立していく。時期的にも比較的集中しており、実方陸奥下向の謎を説こうとする意図のもと、その発達の過程が窺い知れるものでもある。

それに比し、歌人説話は、『今鏡』より始って以来かなり長期にわたって成立していく。一見、内容も多岐にわたるようではあるが、理想の歌よみとしての実方、ということに集約できるものである。歌枕探索の話 (⑥) は無論のこと、業平と並び称せられること (⑧)、業平と入れ替わること (⑨) も歌人としての誉であろう。それに加えて、しょうぶの代りにせめてか

つみをふかせる風流な行爲(①)。又、舞姿の優美であったこと(④)からは、そのままに容姿端麗というイメージが結ばれていく。歌人としては言うに及ばず、その容姿、振舞、そして舞という芸能をも身に備えた、いわば風流人として理想的な人物―実方の像が構成されていくのである。

(附記)

実方の実像を知る為はその資料を蒐集していく中で、実方の生きた時代及び逝去直後の、いわゆる当代の資料を先に扱うのが順序ではあるが、紙数の都合もあり、ここでは、実方死後約百年を経過した一一〇〇年代初頭より現れ始める『説本朝往生伝』以下、近世に到る、実方後代資料とでも言うべきものを整理し、その中であわせて、特に雑多な印象を与えている実方説話というものの姿を明確にしておきたいと考えて、小稿をまとめてきた。大方の御批判を頂ければ幸いである。

(昭和六十年十月七日記)

注

- (1) 池田亀鑑「藤原実方論」(『短歌研究』昭和11年9月号所収)。
- (2) 福田幸子「藤原実方考」(『文学論叢』第39号所収。昭和43年6月)。
- (3) 『拾芥抄』、「又歌人三十六人」の条に、「藤原實方左大臣師尹孫從四位上、左中將、配陸奥國」という記事がある。これは左遷配流説の後のものであるだけに「配流」とされている。「河海抄」中には、明石入道(近衛中將を捨てて播磨守となった)の前例として実方がひかれ、そこには実方「辞左中將任陸奥守……」とある。陸奥下向当時実方は、左中將という京官と陸奥守とを兼任しているので、この記事は誤りである。中世に成立した多くの説話集の中で実方左遷説が主流をなし、当時の人の実方のイメージは「配流」「辞中將」となっていたものであろう。これらは左遷説話が広く浸透している状況の参考となるので下段に収めた。
- (4) 日本古典文学大系『今昔物語集』(昭和38年、岩波書店)。以下、「今昔物語」の引用はこの本による。
- (5) 『栄花物語』細く、別の長徳二年の条に「陸奥の国の前守維叙」とあり、「北山抄」史逸指南に「陸奥守維叙着任之後、前司国用所申請……」とある。国用は「本朝世紀」によって、永延二年(九月十五日)に陸奥守であったことが判明しているので、国用維叙、実方という陸奥守の順序は史実である。又、『尊卑分脈』の維叙の条に「上野常陸陸奥等守」とある。
- (6) 目崎徳衛「実方と陸奥国」(『平安文化史論』)所収。昭和43年、桜楓社。

(7) 日本思想大系「往生伝、法華験記」(昭和49年岩波書店)所収、  
『統本朝往生伝』。

(8) 日本歌学大系(昭和31年、風間書房)所収、「袋草子」。

(9) 正四位下式部大輔藤原朝臣某誠惶誠恐謹言、  
請特蒙 天恩依爲当省承第一被殿任陸奥守闕状

一 京官入殿任陸奥守例

藤原佐世 寛平三年正月任陸奥守兼大藏少輔

藤原実方 長徳元年正月任同兼左近衛中将

源信雅 大治三年正月任同守兼皇后宮亮

(中略)

保延元年六月 日 正四位下行部大輔藤原朝臣

(『新訂増補国史大系』)

(10) 日本歌学大系(昭和31年、風間書房)所収、「和歌色葉」。

(11) 新訂増補国史大系(昭和40年、吉川弘文館)「今鏡」以下、今

鏡の引用はこの本による。

(12) 校国文叢書「源平盛衰記」(大正二年、博文館)以下、「源平盛

衰記」の引用はこの本による。

(13) 日本古典文学大系「山家集」(昭和36年、岩波書店)。

(14) 続群書類従第三十二輯上所収「西行物語」。

(15) 新訂増補国史大系(昭和41年、吉川弘文館)「古事談」以下、

「古事談」の引用はこの本による。

(16) 続群書類従第十六輯所収「古今集序注」。

(17) (18) 補注(一) 前掲論文。

(19) 続群書類従第三十三輯下所収「撰集抄」。

(20) 池田亀鑑氏も前掲論文(補注(一))に於て、「この説話は相当  
古くから存したものと想われるが」とされる。

(21) 『権記』『日本紀略』『本朝世紀』。

(22) 『実方集』をはじめとする当代私家集。

(23) 補注(一) 前掲。

(24) 京都叢書(昭和42年、臨川書店)所収、都名所図絵。

(25) 佐久間義和「笠島道祖神記」(仙台叢書第五巻所収)。

(26) 同じく『都名所図絵』に、

上御霊社は平安城鞍馬口通の南にあり。祭る神ハ(中略)等  
の八所御霊なり。朱雀院の御宇天慶二年に鎮め奉る。いにし  
へ此地ハ上出雲寺なり。故に出雲路の御霊ともいふ(後略)

とある。

(27) 補注(6) 前掲。

(28) 『小右記』寛和元年(六月)臨時祭

先是下官祭仰、ミ一冊左少将實方、進哥如例(大日本古記録)

「実方中将集」。

いはし水のりうしのみつりのつかひに、ためまきの朝臣の  
ありけるとし、まひ人にてかへりての又の目、かきしのは  
なになして

かつらかはかさしのはなのかけみえしきのふのふちそけふはこ

ひしき

みちのふの中將、りんしのまつりのまひ人に、ふたりあり  
しを、もろともにしるになりてのちのまつりの日

いにしへのやまるのみつにかけみえてなをそのかみのたもとこ

ひしも

返し

いにしへのころものいろのなかりせはわすらるゝみとなりやし  
なまし

(29) 『小右記』永観二年十一月五日、正暦四年正月廿二日。

『権記』正暦五年正月三日。

(30) 日本古典文学大系『徒然草』(昭和32年、岩波書店)。

(31) 日本古典文学大系『枕草子』(昭和33年、岩波書店)。

(32) 岸上慎二、新潮日本古典集成『枕草子』(昭和52年、新潮社)。  
株式会社、『枕草子解説』(昭和57年、同朋社)。

(33) 続群書類従第三編所収『兼邦百首抄』。